

2022年6月12日  
宮崎中部教会  
牧師 乾元美

詩編 62 : 2~13

ルカによる福音書 23 : 1~12

「イエスさまの沈黙」

【前奏】

【招詞】 ヨハネによる福音書 16 : 13a

【祈祷】

【聖書】 詩編 62 : 2~13、ルカによる福音書 23 : 1~12

【説教】 「イエスさまの沈黙」

<イエスさまを罪に定めるために>

ルカによる福音書の前回までは、イエスさまが裏切られ、逮捕され、ユダヤ人の指導者たちによって最高法院で裁判を受ける場面までが語られてきました。

最高法院とは、ユダヤ人たちの宗教に関する事柄の最高決定機関です。イエスさまを妬み、邪魔に思っている、最高法院の議員でもあるユダヤ人の指導者たちは、何とかイエスさまを殺したいと願い、その機会を伺ってきました。

それで、とうとうユダの協力によってイエスさまを逮捕し、最高法院の裁判にかけたのです。彼らはイエスさまに、「お前がメシアなら、そうだと言うがよい」、「お前は神の子か」と問いました。イエスさまが「そうだ」と答えたなら、ただの人間がメシアを名乗り、自分を神の子だと言い張った、と言って、神を冒瀆した罪で有罪に出来るからです。

しかし、実際のところ、本当にイエスさまは、神さまに遣わされたメシア、救い主です。本当にイエスさまは、神の御子なのです。これは、神さまの真実です。

旧約聖書の預言は、確かにイエスさまがメシアであると示していますし、イエスさまご自身もそのことを語り、人々に教えてこられました。また、神さまの權威によって、多くの御業を行ない、ご自分が神の御子であることを明らかにして来られたのです。

ところが、イエスさまに反感を覚える最高法院の議員たちは、このことを決して受け入れようとしませんでした。

それで、イエスさまが「今から後、人の子は全能の神の右に座る」、つまり、やがてご自分がすべての御業を成し遂げた後、天の父なる神さまと同じ權威、同じご支配の力を持つ、と語られたことを、神を冒瀆した罪として、有罪としたのです。

イエスさまは、ご自分がメシアであり、神の子であるという真実のゆえに、それを受け入れられない人間の手によって裁かれ、罪に定められたのでした。

しかし、このユダヤ人の最高法院は、イエスさまを有罪としても、死刑の判決を下すことまでは出来ませんでした。当時は、ユダヤ人の住む地域はローマ帝国が支配していたので、社会政治的に影響があるような事柄や、死刑判決などの重大な判断は、ローマ帝国がその権限を持っていたからです。

それで、今日の 23 章以下にあるように、最高法院の人々は、イエスさまを死刑にしてもらうために、ローマの総督ピラトのもとに連れて行きました。

今日のところは、そのように世の権力者の前において、裁きをお受けになるイエスさまのお姿が示されているのです。

<ローマ総督ピラト>

[イエスさまを訴える]

さて、23:1 には「そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。」とあります。このピラトという人物がルカによる福音書に登場するのは、今回で 3 回目です。1 回目は 3:1 で、こうありました。「皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、」云々。今日のもう一人の登場人物であるヘロデも出て来ます。また 2 回目は 13:1 「ちょうどその時、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことを、イエスに告げる者たちがあった。」とありました。

この、ユダヤ地域を治めていた総督ピラトは、いつもエルサレムに駐在していた訳ではありません。しかしこの時期は、ユダヤ人の大きなお祭りである過越祭がありましたから、騒動が起これないように治安を守るため、エルサレムに出張っていたのでしょう。

ですから、最高法院の議員たちは、イエスさまを裁いたその足で、すぐに総督ピラトのもとに訴え出ることができました。

彼らは、イエスさまのことをこう訴えました。23:2 「この男はわが民を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っております。」

ローマ帝国においては、一人のイエスという人物が、ユダヤ人の神を冒瀆したからと言って、死刑にまでする理由はありません。ユダヤ人の宗教的なことは、ローマ帝国の統治に直接は関係ないことです。ですから最高法院も、自分たちが下した「神を冒瀆した」という有罪判決を理由に、総督ピラトがイエスさまを死刑にしてくれるとは考えていませんでした。

ですから、彼らは、イエスさまがローマ皇帝に反抗的な態度を示しており、ユダヤ人にはもちろん、ローマ帝国にとっても危険人物である、と言って訴えたのです。

彼らは「この男は、わが民を惑わし」ている。人々を煽動して何かしそうだと言います。

そして、その理由の一つとして、まずイエスさまが「皇帝に税を納めるのを禁じ」ている、と訴えています。

これは以前、ルカ福音書 20 章のところで、ユダヤ人の指導者たちが「皇帝に税金を納め

ることは、神の律法に適っているかどうか」と、イエスさまに質問をした出来事がありました。実はこの質問は、イエスさまがどうお答えになっても、その言葉じりを捕らえて貶めるための罠だったのです。

しかしイエスさまは、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」とお答えになりました。彼らのたくらみを見抜いて、有無を言わせないお答えをなさったのです。

ですから、この時にイエスさまは「皇帝のものは皇帝に」と言われたのであって、税金を納めることは特に否定しておられませんでした。しかし、今日のところで指導者たちは、「皇帝に税金を納めるのを禁じている」と、真実を捻じ曲げて訴えているのです。

さらにもう一つ、彼らはイエスさまが、「自分が王たるメシアだと言っている」と訴えます。確かに旧約聖書で、「メシア」は「油注がれた者」という意味であり、それは王の任職を示すものでもありました。

それを議員たちは、「自分が王たるメシアだと言っている」という言い方をすることで、あたかもイエスさまが、ローマ帝国に反旗を翻して、皇帝になり替わろうとしている人物のように印象付けようとしたのです。

#### [ピラトの判断]

さてピラトはこれを聞いて、イエスさまに「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問しました。

これにイエスさまは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになりました。

ここは、同じ場面を描いているヨハネ福音書 18：34 の、イエスさまのお答えを見ると、内容が少し分かります。そこではこう言われました。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」

つまり、ここでイエスさまは、尋問にまともにお答えにならず、問いをそのままピラトに突っ返しておられるのです。

さてピラトは、最高法院の議員たちの訴えが、皇帝への忠誠心や、ローマ帝国の安定を願って訴えたものではないということ。ただ、彼らがローマ帝国の権威を利用して、邪魔者であるイエスさまを処分したいだけだと見抜いていたのでしょう。

総督という政治的な立場から、ユダヤ人の宗教的な事柄に介入するのもまた、厄介で面倒なことです。それにイエスさまは、尋問では「ユダヤ人の王」であると、自分でははっきり言いませんでした。

それで、ピラトは祭司長たちと群衆に「わたしはこの男に何の罪も見出せない」と言ったのです。ピラトは、イエスさまが無罪であると判断したのです。

しかし、訴えて来た人々が引き下がらないので、ピラトはイエスさまがガリラヤ出身と聞き、この厄介事をガリラヤ領主のヘロデに投げることにしたのです。

#### <ガリラヤ領主ヘロデ>

さて、ヘロデもまたエルサレムに滞在していましたので、すぐに最高法院の議員たちや群

衆は、イエスさまを連れてヘロデのところへ向かいました。

8節にはこうあります。「彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。」

このことは、ルカ福音書の9：7以下ですすでに語られていたことです。

ヘロデは、洗礼者ヨハネの首をはねて、処刑しました。するとその後、イエスさまがそのヨハネの生き返りだ、といううわさが耳に入ってきたのです。その時にヘロデが、「イエスに会ってみたいと思った」とありました。

それは、奇跡の御業や、力ある教え、そのようなことへの関心だけでなく、自分が処刑したヨハネの生き返りと聞いて、恐れや不安もあったからに違いありません。イエスという人物を自分の目で見て確かめたい、と思っていたのでしょう。それに13章には、イエスさまに「ヘロデがあなたを殺そうとしています」と忠告する人がいたことも書かれていました。

そんなヘロデは、とうとう念願叶って、イエスさまと対面できることになったのです。

ヘロデはいろいろと尋問しました。しかし、イエスさまは何もお答えにならなかった、とあります。

その間も、祭司長たちと律法学者たちはイエスさまのことを激しく訴え続けていました。ピラトの時のように、事実を歪め、また皇帝に敵対する人物かのように訴えたのでしょう。そうして何とか、イエスさまの死刑判決を引き出したかったのです。

しかしヘロデは、イエスさまが黙ったまま、言われるがままなので、特に危険とも、恐れるべき人物とも思えなかったのでしょう。かつては殺したいとまで思っていたようですが、そんな気も失せたようです。やがて兵士たちと一緒にになってイエスさまをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せて、王のように見立てて、ピラトに送り返した、とあります。

つまり、ヘロデもまた、イエスさまには死刑判決を下すまでもない、と判断したのです。

この日以来、敵対していたヘロデとピラトは仲がよくなった、と語られています。地上の権力者である二人が、神の御子イエスさまを裁くという立場にあって、この厄介事を通して一致したというのです。

これは、詩編2：2「なにゆえ、地上の王は構え、支配者は結束して主に逆らい、主の油注がれた方に逆らうのか」という御言葉の成就であると考えられています。

#### <無罪のイエスさま>

今日のところで語られていることは以上です。さて、このピラトとヘロデにイエスさまが裁かれる場面で示されていることは、一体何なのでしょう。

それはまず、二人の地上の権力者、ローマ総督であるピラト、そしてガリラヤ領主であるヘロデとも、イエスさまに対して、死刑に値する罪を認めなかった、ということです。

イエスさまに罪がないと認める、二人の裁判官、二人の証人がいる、ということです。

イエスさまが、父なる神さまに対して背いたりなさらず、最後まで従順に御心に従い抜かれる、まことに罪のないお方であった、ということは事実です。

そして、この地上の裁判においても、イエスさまは罪のないお方であった、と認められているのです。それでもなおイエスさまが罪人とされたのは、人々の妬み、偽証、敵意など、まさに神さまの御心に従わない人間の罪によるということ。それが、ここで明らかにされています。

次回の聖書箇所は、人々の声によって、最終的にイエスさまに死刑判決が下るのですが、それはまことに罪のないお方であるイエスさまを、神さまに背く罪人が、罪に定め、十字架につけた、ということなのです。

### <沈黙して裁かれるイエスさま>

そして、もう一つ示されていることは、この裁きに対して、一貫してイエスさまが沈黙しておられる、ということです。

ピラトの尋問への答えは、何かを主張するようなお答えではなく、ただ問い返されただけでした。ヘロデの時には全く口を開かれませんでした。

これは、イザヤ書 53 章の「主の苦難の僕」の一節を思い起こさせます。そこにはこうありました。「わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を刈る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。」

この、罪を負わせられ、口を開かない苦難の主の僕は、まさにイエスさまのお姿なのです。

人々の偽りの訴え、激しい敵対、あざけり、侮辱。そのどれに対しても、イエスさまは口を開かず、ただ耐え忍んでおられたのです。

イエスさまは、これまで神の国について、神のご支配について語ってこられました。人々に、救いについて、罪の赦しについて語り、神さまのもとに悔い改めて立ち帰るようにと、招いてこられました。それが、イエスさまの口から語られてきた御言葉です。

イエスさまは罪人を招き、赦し、生かす、そのような恵みの御言葉を語られてきたのです。

しかし、人々はその御言葉を受け入れませんでした。むしろ、そのイエスさまの御言葉、神の御言葉を否定し、歪め、自分たちの偽りの言葉、敵対する言葉ばかりを語るのです。

もし、この場でイエスさまが口を開かれたなら。それは、神の裁きの言葉となったでしょう。人々は、神の御子の真実の御言葉の前で、神への背きを暴露され、偽りを指摘され、罪を顕わにされ、裁かれることになるでしょう。

しかし、イエスさまは沈黙なさったのです。ここで、神の裁きを人々に下すことなく、ご自分が黙って人々に裁かれることによって、ご自分が人々から罪に定められることによって。

イエスさまは、神さまの御心に従わず、背き、敵対する人々が受けるべき罪の裁きを、御自分の身に引き受けて下さったのです。沈黙して、イエスさまが人々に裁かれることで、本来人々に下されるべき神の裁きを、ご自分の身に引き受けられたのです。

人々が、わたしたちが、神さまを知らずにいた時。あるいは神さまを疑っていた時。背いていた時、敵対していた時、ののしっていた時。神の御子は、そのわたしたちが救いへと至るために、それらを沈黙して耐え忍び、裁きを受けておられました。そして、わたしたちの罪のために、ご自分が罪に定められ、わたしたちの罪のために、十字架にかかって死に、わたしたちが神の裁きを免れ、罪を赦されて生きる道を拓いて下さったのです。

#### <神に向かう沈黙>

そして、イエスさまは、この沈黙の中で、ただ神さまの御心を見つめておられました。

聖書に語られる沈黙には、意味があります。それは、沈黙とは、神さまに向かうことである、ということです。今日読まれた詩編 62：2～3にはこうありました。

「わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある。

神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない。」

6節以下にもこう繰り返されます。

「わたしの魂よ、沈黙して、ただ神に向かえ。神にのみ、わたしは希望をおいている。

神はわたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは動揺しない。」

沈黙とは、人間の言葉を語ることをやめ、神さまが語られること、神さまの御言葉にのみ、耳を傾けることです。ひたすら神さまに集中して向かうことです。

イエスさまはこの時、人間の語る言葉を耐え忍び、ご自分の口を閉ざされ、父なる神さまに心を向けておられました。父なる神さまが成そうとしておられる御心。人々を愛し、憐れみ、救おうとなさるご計画。そして、そのことを必ず実現して下さる、神の御力を見つめて、ただそこに希望をおいて、メシアとして歩むべき道を、歩み通そうとしておられたのです。

わたしたちの罪の赦しは、救いの御業は、イエスさまが、このように沈黙して耐え忍び、実現して下さったものなのです。

詩編 62：12、13節にはこうあります。「ひとつのことを神は語り／ふたつのことをわたしは聞いた／力は神のものであり／慈しみは、わたしの主よ、あなたのものである、と」。神が語り、わたしは聞く者です。

わたしたちもまた、まことに耐え忍ばなければならない状況の時には、苦難の時には、人間の虚しい言葉が溢れている時には、沈黙しなければなりません。ひたすら、神さまに向かうのです。人の言葉ではなく。また自分の言葉ではなく。神さまの御言葉を聞くのです。神さまの御心を求めるのです。

その時にわたしたちは、このわたしの罪のために、あざけりや侮辱を沈黙して耐え忍んで下さった、イエスさまのお姿を見るでしょう。わたしの苦しみの只中に、わたしたちの罪を

担ってさらに苦しんでおられる、十字架のイエスさまを見るでしょう。

そしてそこにこそ、すべてを支配し、覆い、救い出して下さる神さまの力、神さまの慈しみを見出すことができるでしょう。

この詩編にあったように、わたしたちの言葉は、欺きに満ちており、虚しいものであり、人を傷つけたり、また自分も傷つけられたりしています。

そこにまことの癒しを与えて下さるのは、イエスさまが沈黙の中で受けて下さった傷なのです。「彼の受けた懲らしめによって わたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって わたしたちはいやされた。」イザヤ書の「主の僕の歌」(53:5)が語る通りです。

そして、わたしたちの言葉が、互いに愛し合い、互いを生かす言葉へと変えられるのは、わたしたちが共に神さまの御言葉を聞き、共に十字架のイエスさまの赦しの中に立たされることによってなのです。

そうして、神さまの恵みがわたしたちの内に満ちた時に、はじめてわたしたちは、罪によってもつれる舌が解放されて、語るべき言葉を語る事ができるのです。

#### 【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまがひたすら沈黙して、神さまの御心に従い、わたしたちのために罪の裁きを受けて下さったこと。痛みを、侮辱を、耐え忍び、沈黙して、わたしたちの罪を担い、わたしたちの裁きを担って下さったことを、悔い改めをもって感謝いたします。

どうかわたしたちが、虚しい言葉、侮るような言葉を口にせず、沈黙して、神さまに向かい、神さまの御言葉にこそ耳を傾ける者として下さい。

そして、御言葉によって告げられた、イエスさまの罪の赦しの中で、神さまをほめ讃え、賛美し、また互いを生かす言葉を語る者として下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 438 「若き預言者」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 25 「父、子、聖霊に」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン